

2022年10月25日発行
日本比較文化学会関東支部

2022年度第1号のレター発行となります。本号では、2022年9月17日(土)にZoomにて開催されました「第56回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部長 高橋 強

◆第56回 関東支部例会 ご報告◆

2022年9月17日(土)にZoomを利用し、第56回関東支部例会が開催されました。当日は6名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部 支部長 高橋 強(東海大学)

◆研究発表:

1. CLIL を用いた授業実践: アンケート結果から見てきたもの

高橋 強
東海大学准教授

現在の大学英語教育は、人文科学から理系の分野まで、その専門に特化した英語教育を実践するようになってきている。また各学部単位においても専門科目に特化した英語教育を重視するという方向に舵を取りつつあり、その教える内容も政治経済の分野はもちろん SDGs といった最近注目を浴びている分野まで多岐にわたり大きな変化を遂げている。その一つに CLIL (Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習理論) がある。この大きな潮流は今後の大学英語教育を大きく変化させ、多大な学習効果を生み出すメソッドとなっている。そこで今回の発表では、アンケート調査を行い、特にこの調査から明らかとなった事柄を中心に発表するものとする。この CLIL メソッドをどのように大学の英語の授業で効果的に取り入れて、CLIL という学習内容を重視した英語教育を実践し、英語のインタラクションを引出し、専門性の高い学習項目を学生が学んだ際に、如何に効果的に専門的な内容と英語学習をリンクさせ英語力を伸ばし、その応用と発展につなげ、英語のインタラクションおよびリプロ

ダクション活動につなげることができるのかということに焦点を絞り、CLIL と専門英語の相互補完の関係をアンケート結果から考察し、学生からの回答を受け、CLIL メソッドを使用した良い授業とはどのようなものなのかについてアンケート結果、指導法、学生のニーズなどから考察を深めるものとする。筆者は、本年の春学期に神奈川県藤沢市にある日本大学生物資源科学部の獣医学科で非常勤講師として最上級レベルのクラスを担当し、科学英語という科目を内容統合型英語学習 (CLIL) メソッドを駆使した英語教育を実践し、特に持続可能な開発目標 (SDGs) という分野に関しての英語教育 (CLIL) を行った。本論文では、この英語の授業実践について述べ、学生に質問紙による 5 件法でのアンケート調査を行い、それに基づいてデータを収集し、分析した結果を述べることとする。

2. 高等学校応援団の活動役割の可能性に関する一考察

金塚基
東京未来大学准教授

日本の学校教育では、運動会・体育祭、部活動の試合、文化祭、その他競技会などの様々な場面でクラスや学校集団単位での応援活動が行われる機会が多い。そこでは、無意識的に、生徒たちが皆で応援することが当然とされている。

こうした生徒の応援活動の動機づけに関する背後の要因として、学校やクラスなどの準拠集団に対する個々の生徒のアイデンティティの存在が不可欠であると考えられる。一方、学校教育においては、生徒の集団的なアイデンティティが育成されることは、生徒の将来的な自立を含めた社会適応のプロセスにおいて重要な目標といえる。

まず、本報告では、高等学校生活におけるこうした生徒の応援活動に対して、学校生徒から組織される応援団が、一般生徒の「応援活動の統制」および「学校集団アイデンティティ形成の促進」という活動役割を担ってきた状況を整理する。

そして、以上の観点を念頭に、2022年5月から8月にかけて、高等学校における応援団の活動が盛んであるといわれる仙台市 (宮城県) ならびに高松市 (香川県) のそれぞれの地域圏における高等学校の応援団を事例として訪問観察を行った。

これらの両地域圏を含めた高等学校応援団を観察することを通じて、当然、個々の学校ごとにその活動のあり方や応援スタイルに特徴やバリエーションをみることができる。しかし、より大きな二つの地域的な区分として、それぞれに含まれる諸応援団にも視点を当てた結果、さらに応援団の活動様式に関する一定のバリエーションの基軸が浮かび上がる可能性がある。そのような経緯と結果から若干の知見を提示したい。

3. 中国の大学における日本語母語話者教師と非母語話者教師による協働の実態 —日本語非母語話者教師に対する調査から—

李 雪珍
宇都宮大学大学院 博士後期課程

国際交流基金 (2020) によれば、2018 年の時点で中国の日本語教師の総数は 20,220 名で、うち日本語非母語話者教師は 17,676 名、日本語教師全体の 87.4% を占める。それに対して、日本語母語話者教師の数は 2,544 名、約 12.6% に過ぎない。このデータから見ると、中国の日本

語教育現場では日本語母語話者教師が少ないと言えるだろう。このような状況で、両教師間がどのように協働するかが課題になっている。

中国では、日本語母語話者教師と日本語非母語話者教師は同じ教育機関で働き、学生や学校に関する同じ情報を共有し、寮生活を送る学生たちの環境を生かして行われるイベントと一緒に参加したりしている点が特徴となっている。どの教育機関においても協働は必要とされており、特に中国でもっとも多く学習者がいて多様性がある教育現場から多くの知見を得ることが期待されているだろう。しかし、教師間の協働に関する先行研究は、タイ人教師と日本人教師の協働を中心にして進められている。中国の教育現場では、協働について研究された例は少ないと思われる。したがって、今後進める必要があるだろう。

本研究は教師間の協働に注目し、日本語非母語話者教師を対象として、中国の教育現場における教師間の協働の実態を明らかにした。その結果、タイと違い、中国では日本語母語話者教師と非母語話者教師は同じ教室と一緒に入って教えるようなティーム・ティーチングの形態がほとんどなく、それぞれの役割を分担し、授業の打ち合わせや日本語コーナー、スピーチコンテストなどで協力し合っていることがわかった。また、協働が少ない理由や原因を分析する必要があるが、これを今後の課題としたい。

参考文献

国際交流基金 (2020) 『海外の日本語教育の現状：2018 年度日本語教育機関調査により』 国際交流基金

4. 江戸俳諧における牡丹句—白居易の牡丹詩の受容を中心に—

蔡麗文

宇都宮大学大学院 博士後期課程

牡丹は中国原産の花であり、漢代の『神農本草経』の中で薬として記録されているように、長い薬用の歴史を持つ。牡丹の美しさに対する賛美は盛唐の頃に始まった。玄宗と楊貴妃が牡丹を楽しみ、李白が詩を詠じた逸話が広く知られている。牡丹は平安時代に薬用植物として日本に渡来し、後に観賞用の花として寺院、公家や貴族の庭園で栽培され始めた。『菅家文草』(900年成立) 巻四には、「法花寺白牡丹」詩が収録されており、これは牡丹が日本文学に現れる最古の例である。

江戸時代、牡丹は新しい季題として俳諧に取り入れられた。牡丹には「富貴草」「廿日草」「深見草」など多くの異名が付与されている。この中で、「廿日草」の呼び名は白居易(772年～846年)「花開花落二十日」(『牡丹芳』)に由来すると先行研究で指摘されている。『詞花和歌集』(1152年成立)には「咲きしより散りはつるまで見しほどに花のもとにて二十日経にけり」の歌もこの詩に学ぶところがあつたと見られる。

牡丹の異名である「二十日草」の由来は白居易の詩であるが、この異名は唐の時代及びそれ以降の文学作品中に管見の限りでは見られない。一方、「二十日草」は日本で今日まで伝えられ、日本文学において発展し、牡丹独自の異名として定着した。

白居易の作品は、平安時代の『和漢朗詠集』に始まり、日本文学に大きな影響を与えた。日本では、漢詩だけでなく、和歌、俳諧と謡曲の中にも白居易からの影響がうかがえる。多くの先行研究では白居易と日本文学を論じたが、白居易と俳諧についての研究は数少ない。本発表では、江戸俳諧における牡丹句の、白居易の牡丹詩からの受容を考察する。白居易の『白氏文集』における牡丹詩を列挙すると12首ある。本発表はそれの一つずつ取り上げて分析し、江戸俳諧における牡丹句と比較検討しながら、白居易の牡丹詩からの受容を解明する。

5. 中国における大学生のキャリア・アダプタビリティの規定要因に関する研究 —学生エンゲージメントの視点から—

鮑 婕嬰

お茶の水女子大学大学院博士後期課程

中国において、1990年代に始まった高等教育の量的拡大を受け、大学生の就職問題が社会問題となっている。そこで、大学生の職業社会への移行を円滑にするために、企業側に求められる職業スキルの育成について注目が集まっている。しかし、グローバル化の進展により、企業組織の安定性が失われつつある。この時代に晒されている大学生にとって、自己のキャリアを組織に委ねるのではなく、自らのキャリアを構成していくことが重要である。自らのキャリアを構成していくには、キャリア・アダプタビリティという心理的資源が重要な役割を果たしていると考えられている。中国における大学生のキャリア・アダプタビリティに関する先行研究は大学生の個人特性と大学生の受けたソーシャル・サポートから検討されているが、彼らの生活の場である大学での様々な経験がキャリア・アダプタビリティの形成にどのような影響を与えているのかについて検討されていない。本研究は、大学生の大学における経験を「行動」、「認知」、「情緒」から構成される学生エンゲージメントの概念によって捉え、質問紙調査で学生エンゲージメントがキャリア・アダプタビリティに及ぼす影響を検討した。その結果、「キャリア統制感」には、「学習の方略」と「学習プログラムへの参加」が有意な負の影響を、「周りとのかかわり」が有意な正の影響を及ぼしていた。「キャリアへの計画性」には、「学習の方略」、「学びへの熱意」、「周りとの関わり」が有意な正の影響を及ぼしていた。「キャリア構築への自信」には、「学習の方略」、「学びへの熱意」「周りとのかかわり」が有意な正の影響を及ぼしていた。「キャリア向上心」には「学習の方略」、「学びへの熱意」「周りとのかかわり」が有意な正の影響を及ぼしていたことを明らかにした。

6. NHK のラジオ国際放送が伝えた「拉致問題」

田中 則広

淑徳大学 准教授

本研究では、北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国を聴取対象地域の一部とする NHK のラジオ国際放送「NHK WORLD-JAPAN」のコリアン・ニュースを分析対象として、北朝鮮による日本人拉致問題に関するニュースの扱いについて検証した。

期間は2021年7月から2022年6月までの1年間としたが、この間に報道されたニュース項目は3,202本に及んだ。

分析結果からは、拉致問題関連ニュースの本数は月ごとの差が大きく、一定量をコンスタントに報道するというよりも、関連するニュースが出た際に集中的に伝えるスタイルであることが推察された。また、弾道ミサイルを頻繁に発射するなど、世界的にも注目を集める北朝鮮の動向を伝えるニュースはトップ項目で扱われることが多い一方で、拉致問題関連ニュースのオーダーについては中盤から後半に集中する傾向がみられた。さらに、NHKの国内向けの主要ニュースとの比較においては、日本国内における拉致被害者の家族会の動向もさることながら、拉致問題に関連した首相や官房長官の発言を時間的に長めに伝えるといった特徴を読み取ることができた。

◆閉会の挨拶： 関東支部部長 高橋 強（東海大学）

次回の例会は2022年12月18日（日）にZoomにより開催する。